ささやき　２月号　NO, 129

『小さな芽のたくましさよ』

ほっこりさん

今年は暖冬で終わるかもしれないという淡い期待を裏切るように、厳しい寒波がやってきました。『冬の厳しさ』を痛感したのは北風にカウンターパンチをくらった時だったでしょうか（笑）。幼稚園では少しずつ“修了”や“卒園”という言葉が聞こえ始め、寂しさを感じつつも春の訪れを意識する時期となりました。春といえば、私は旬の『タラの芽』をいただくのが楽しみの一つです。天ぷらにお塩をちょっとつけていただくのが好みです。実は大人になってもしばらくの間、タラの芽のことを『ふきのとう』と勘違いしていました。同じ頃に店頭に並ぶからかでしょうか。

さて、本物のふきのとうは雪どけの季節、冷たい土の中からひょっこり顔を出します。厳しい寒さの中でも、音も立てずにじっと春の準備をしてきたことをその姿で教えてくれます。子どもたちの育ちもまさにこれと同じだと思います。目に見える変化は小さくても、日々の生活の中で育まれた力は積み重なり確かに大きくなっています。運動会や発表会のような大きな行事を見れば一目瞭然ですが、何気ない日常の振る舞いすべてに成長が宿っています。幼稚園で過ごす時間の中で、できるようになったことがたくさんあると思います。時には壁にぶつかり、くじけながらも向き合ってきた時間こそが春に伸びる芽を育てているのかもしれません。自分より小さい友だちのことを、自然に思いやることができる子どもたちの姿にたくましい春の芽を感じる今日この頃です。一日一日を雪の下で息づく小さな芽のような子どもたちを、大切に見守っていきたいと思います。この冬を超えた先には、それぞれの春が待っているのですね。春はもうそこまで来ていますよ。

年長になると社会性も育ち、園外保育の行き先もずいぶん広がります。以前は劇団四季のミュージカル鑑賞で、キャナルシティ福岡に出かけていました。劇団四季の福岡撤退が決まった時は困惑しましたが、ちょうど同じ年にキッザニア福岡が誕生しました。当初は幼児の団体利用は難しいと考えていました。しかし偶然にも営業に来られたキッザニアの方が当園の卒園児だったこともあり、利用について詳しく話を聞くことができました。検討を重ねる中で心配のあまりあれこれ質問する私に、その方はこう言われました。「子どもには子どもの世界があります。大人が介入しすぎず子どもの力を信じて任せてください。」と。その言葉にハッとしました。普段“子どもたちの持っている力をもっと信じて”と伝える立場の私たちが、親心ゆえにあれこれ『転ばぬ先の杖』を出しすぎていたようです。実際に思い切って出かけてみると、子どもたちの真剣な眼差しや友だちと協力し合う姿は実に頼もしいものでした。引率の私たちは外から見守ることしかできませんでしたが、子どもたちを信じて送り出せたからこそ園とは違う輝かしい一面に出会えたのだと思います。子どもたちは私たちが思う以上にちゃんと育っていますよ。今必要なのは大人が『見守る勇気』を持つことかもしれません。信じて見守ることで、その芽はたくましく育つのだと確信しています。余談ですがキッザニアには他園、他校の生徒も来ていました。あるブースで小学生の女の子が当園の園児に制服を着せてくれているのを見かけました。子どもたちの世界はこんなにも優しく広がっていくのだと改めて教えられた気がしました。

園長：讃井　理香